見聞録

bootleg-books

1

+++　1　+++

　工事現場の朝は早い。

　規定では朝８時からスタートだから、ソレ以前からやっている業者はホントだったらルール違反。
　現場のゲート（正門）は太い鎖がとってにグルグルと巻き付けてあって、冗談みたいに大きな錠でガッチリと施錠されている。
　もちろん定時になるまで絶対開かない。
　周りを取り囲んでいる塀はとてもじゃないけど乗り越えられるような高さじゃない。（…っていうか、そんなことしてたら立派な不審者だよね）
　基本的には時間前に現場の中に入り込むのは不可能。
　……表向きはね。
　でも、実際のところ、現場の朝は早いのだ。
　現場の入り口はなにも正面ゲートだけじゃない。
　『現場の職人がこっそり作るんだよねー』
　ってコウイチさんが笑いながら教えてくれた。
　『囲いっていうのは必ず抜け穴があるんだよ』
　ココ、杉並の現場もゴタブンに漏れず建物の横に明らかに不自然なドアが取り付けられている。
　このドアは鳶職人さんのサービス。足場組みの最中にさりげなく取り付けてくれたんだって。
　ドアにはよく自転車とかに付いているワイヤーで出来たナンバー式の鍵が一つ付けられているだけ。
　ナンバーは5963（ごくろーさん）
　事実上出入り中のドアなんだ。

　今日も現場近くの百円パーキングに車を停めると、高野（タカノ）電気工事の職人達は真っ直ぐに建物の横の細い隙間に入って行く。正面ゲートには目もくれない。
　時間は朝六時三十分。

　……現場の朝ってハンパ無く、早い。

2

俺は今年の七月から見習いの電気工事の仕事をやっている。

高野電気工事。

親方さんと息子のコウイチさんの二人きりの小さな小さな有限会社。
工事現場って環境のせいか、一緒に仕事をしている仕事をしている人達は皆ハッキリとした性格の持ち主ばかりだ。
眼光の鋭さは、現場の職人って言うよりもむしろヤクザに限りなく近い親方さん。
見た目はものすごく怖いけど、実は優しい（…と思う…多分…）ヘビースモーカー。
その親方さんの息子のコウイチさんはこの次の現場から親方さんの後を継ぐ、高野電気工事の二代目。
普段はすっごく優しくて面白い人なんだけど、一旦キレると人格が豹変する。
一部の職人さんの間では、密かに『狂犬』って呼ばれて恐れられている存在。
『狂犬モード』に入ってるコウイチさんは、見た目がほっそりとした美人系な分、そのギャプは果てしなく大きい。
俺より二つ年下だけど、肝の座り方とかハンパ無い。
親方になる修行（？）として、この現場の電気工事の指示は全部コウイチさんが出している。
それから、立場だけだったら俺と同じ『見習い』の谷田雄太（やたゆうた）君。
彼はコウイチさんの高校生時代からの友人で、電気工事の手伝いを始めて二年目って話だ。
すごく落ち着いた人で、見た目より年上に見える。
仕事も見習いって言ったら失礼なんじゃないかってくらい出来て、親方さんとコウイチさんの信頼も厚い。
『～っス』って感じの体育会系の話し方が特徴。
この前ちらっと聞いたんだけど、将来の夢はカメラマン。
この仕事は夢を叶えるための資金集めのためだって教えてくれた。
親方さんもコウイチさんも谷田君の夢を全面的に応援している。
現場が忙しくなると現れるピンチヒッター的存在のコウイチさんのお姉さん。
このお姉さんはコウイチさんより三つ上（つまり俺の一コ上）。
コウイチさんにとても良く似たキレイな人。
およそ現場では見ないようなタイプなんだけど、この人を見かけで判断してはいけない。
幼少の頃から親方さんから直接電気工事のイロハを叩き込まれていて、図面も見るし書けるし、工事も出来る。
『ん？現場は好きだよ。でも、女はまだまだ受け入れてもらえないからね』
って、あっさり二代目の席をコウイチさんに譲ってしまったって話。
マイ腰道具には使い込まれたお姉さん専用の道具が一揃え。

ペンチなんかはドイツ製のものすごく切れ味の良いヤツだって谷田君が言っていた。
因にお姉さんの道具を無断で使うとものすごぉぉ…く、怖いらしい。

最後に俺。
名前は岡野良行（おかのよしゆき）。
地味が取り柄の三十一歳。諸処の事情も起因して独身。
元々は製薬会社で働いてたんだけど、激務が祟ってストレスで胃に穴が開いちゃってリストラ。
貯金が底をつく直前に困って読んだ求人広告の雑誌で見付けたのが完全予約制の派遣会社。
こんなご時世だから時給は低い。
製本だったら八百円。
構内軽作業だったら八百五十円。
現場アシストだったら千円也。
色々回って、今年の七月に初めて高野電気工事を紹介された。
その時に親方さんに気に入られて、派遣会社を通さずに通ってくれれば日当を一万円にするよって言って貰えて。で、今日に至っている。
皆凄く良い人ばかりでとっても助けられている。
…でも、これからもこの仕事をずっと続けられるかって聞かれると…まだそんな決心は付けられない。
やっぱり現場工事は楽じゃないし、お世辞にもキレイとは言えないし。
でも、この時期就職活動が辛いのは体験済みで。
まぁ、景気が良くなるまでの繋ぎ程度で考えてる…っていうのが正直な気持ち……かな。
今よりも稼ぎが良くて楽な仕事があったら、やっぱりそっちに行くと思うし。
もう、辛いのとかってこりごりだから。
前の会社だって本当にやりたくて勤めていた訳じゃない。
学校卒業したら就職するのが当たり前、みたいな感じだったら自分に合いそうな会社を探して見付けたのがまえの会社ってだけ。
最後に所属していたのは営業課。
これでも営業マンだったんだ。
最悪だったけどね。
毎日毎日お得意先回って。
愛想笑いで。
ずっしり思い鞄を持って。
夏なんか汗だくで。
契約取れないと上司の厭味がだらだら続くし。取ったら取ったで同僚からちくちくちくちく妬まれて。
セクハラなんてのも当たり前にあったし。
営業成績が上がらないと、取れるんなら何でもやってこい！！

……みたいな、ね。
…ははっ…なーんだ。
前の仕事もキレイなんて言えないじゃん。
ま、先のことはまだ考えられないよ。
…なんて言ってる年でもないんだけどね……。

「岡野君」
「はい？」
「今日、二階から五階までのダウンライト、一人で回ってもらっても良い？」
「あ、はいっ。…あ、でも昨日の分、まだ六部屋残ってますけど？」
「うん？あ、今日からまた暫く土曜はアネキが来るから大丈夫だよ」
十一月最後の土曜日。朝、六時四十五分。
荷物置き場にと陣取った電気室で、材料に囲まれた真ん中の狭いスペースに男四人で朝の打ち合わせ。
缶コーヒーの甘ったるい味が口の中に広がる。
「あ、それじゃあココ片付けておかないとまたお姉さんに雷落とされちゃうんじゃないですか？」
「……あー…多分大丈夫……かな…。アネキも現場が修羅場に入ってきたらそんなにガミガミ言わねーと思うし」
いつものコウイチさんらしくない歯切れの悪さ。
コウイチさん、実はお姉さんのこと怖いんだよね。
八月の中旬、親方さんが夏風邪でダウンした時にお姉さんが助っ人として現場に来てくれたんだけど、コウイチさん、開口一番に
『コウイチッッ！！あんたまた散らかしてっっ！！現場の詰め所は整理整頓っ！！基本でしょっ！！！』
と、怒鳴られたのだ。
普段は電気屋の狂犬と他の業種の職人さん達から一目置かれているコウイチさんが（しまったぁぁっ）って顔で固まったのを見たのって、まだあの時の一回だけだ。
バシンバシンと落とされるお姉さんのカミナリに打たれながら大慌てで電気室を片付けるコウイチさんは、いつもの血の気の多さはどこへやら。まるで叱られた子供みたいで、何とも可愛らしかった。
「…や、でもコレはちょっとヤベェんじゃねェの？」
谷田君もお姉さんの怖さは良く心得ているらしい。
「……だよなぁ…」
「恵美は怒らせると厄介だからな。雄太と岡野は朝礼までにちぃーっとばっかりキレイにしていてくれ」
タバコをふかしていた親方さんが紫煙を吐き出しながら言った。
六畳はあるこの電気室、ここのところの忙しさに任せた結果荒れ放題になっている。
最初の頃は届いたはずの棚がいつの間にか電材という障害物に阻まれて、遠い存在に成り果てている。
言い訳にしかならないんだけど、新しく入る電材で前の材料は地層（？）の下になって、足の

踏み場も無い状態だ。
　下手に下の層を動かしたら、相当深刻な雪崩が起きるのは間違いなさそうだ。
　『はいっ』
　俺と谷田君は残りのコーヒーを一気に飲み干し、急いで掃除に取りかかった。

見聞録

http://p.booklog.jp/book/35329

著者 : bootleg-books
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/bootleg-books/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/35329

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/35329

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.